

北街道と峠道——倉真地区を中心に——

村松國義

の数からも知ることができる。

十五世紀後半に、美人ヶ谷城、滝ノ谷城、倉真城、松葉城、が相ついで創築され、その他、この街道には、東に五和の八講、山砦や横岡城、志戸呂城、西に構江の平塚砦、本郷の本郷城、高藤城などがある。

『倉真村は、高萩川の上にして、日根の上の郷中、山間の村落最も深く入るものなり、倉真とは倉間と言うなり……。倉とは暗き義にや、都で両山の間によりたる地形をさして言えり……。倉真村は全く渓間の村落といえども、其境やや広く、上下二組となれり。』と掛川誌稿に記されている。

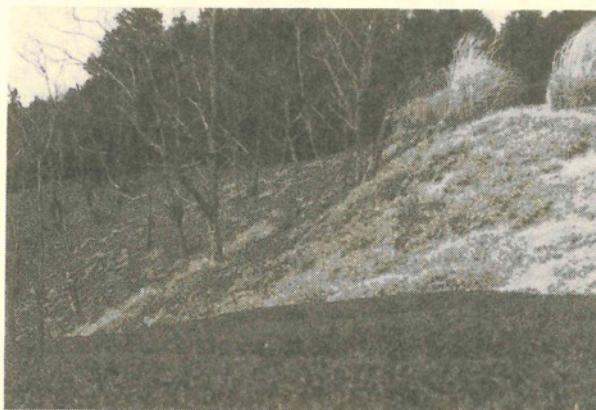
倉真川に沿つた袋状の谷であり、その各所に集落が点在する。この谷は、近世以前においては東海道の北街道（裏街道）として人の往来があつたと考えられる。倉真地区の北掛道の経路を辿り、谷の各集落より峠越えの道について考察してみたい。

一、北街道の周辺

北海道は、東海道に対する裏街道としての役割をし、現在でもその道すじを辿ることができる。

桜木から西郷に入り、五明から石ヶ谷、滝ノ谷と山麓に沿つて北上する。長間の谷に入り、前の谷からおじょろ坂を越え、倉真の里在家に出る。里在家から金井場を通り、出合橋から大宮の前を通り、貝島より秋葉山の祠の前から佐野原へと上る。

二、峠越えの交通路



佐野原は、当時の村中のまぐさ刈場であった。尾根づたいに粟ヶ岳西麓の榎の辻と呼ばれる辻で、松葉からの道を合わせて南麓にまわり、東山地区を通つて、五和地区的安田に至る。そして、大代川の谷へ下る。志戸呂より大井川をわたり、島田の相賀へと東進していく街道である。

今でこそ通る人のない山道であり、里道であるが、当時は重要な交通路であったことが、この街道すじに沿つて残る城砦址

地形的に、粟ヶ岳を中心としたこの地域の住民は、周辺地域との往来は徒歩による山越えの道しかなかつた。現在は、あまり利用されていない峠道も当時としては重要な役割を果たしていたと思われる。北街道をはさんで両側の山越えの道は、現在でも確認することができ、次に踏査した概要を記す。

(一)、里在家——長間前ノ谷。

この道は、北街道の本道である。世楽院の裏山を通る。道巾も広く、上西郷山間部との交通の重要な峠である。

(二)、戸沢——大沢——丹間。

金井場から戸沢川に沿って北上する山道である。最奥部の大沢部落から村境の尾根に上る。尾根道をたどり、丹間、東道、庄司へと通じている。この丹間道は、原野谷川をさか上り、大代へぬける間道のひとつでもある。

(三)、真砂——奥山川西沢——東道・庄司。

真砂百觀音のすそを奥山川に沿って、通称「くつぬぎ坂」をのぼり、猪渕の上を通って西沢より峠に出て、東道・庄司方面に下る。

(四)、真砂——松葉牛の下——庄司。

現在の県道二六七号線（赤根・金谷線）とほぼ同じ経路である。真砂より松葉トンネルの上を越え、松葉城跡のある山すそに出る。このあたりには、切り割りの旧道が跡をとどめ、施餓鬼坂と呼ばれる地名も残っている。さらに川に沿って前後、牛の下と過ぎ峠に出る。尾根に牛石の名石が現存する。峠から北に下ると庄司の部落へと出る。

(五)、貝ヶ島——佐野原——榎の辻——東山——安田。

この道は、北街道の本道である。途中、西からくる青田、西山、柳沢の道を榎の辻で合わせて東進する尾根道で、東山・安田そして大代へと続いている。榎の辻には現在も榎の木が植えられており、当時のおもかげをしのぶことができる。

(六)、谷川——青田——初馬。

現在の自動車道の東の山中に旧道があり、戦前までは、徒歩での往来が可能であったが、現在ではやぶにおおわれている。

(七)、谷川——天神山——殿ヶ谷——水垂。

当時、掛川城下へ通じる道としては、最短距離であり地域の

特産物の搬路としても重要であり、人の往来もはげしかつたと考えられる。

(八)、乙星——岡田山——湯治ケ谷。

乙星から岡田山の東側を越す道であるが、今は通る人もなく通行不能である。

(九)、牛丸——構江。

岡田山牧場から西進し、池の横を通り、構江に出る山道である。

その他、当時の道路として確認できるものは、金井場より北街道と分かれ、倉真川東南側の山麓を南下し、天神山の峠へと続く道である。金井場の十字路から山へのぼり、諏訪池の横を通り、現倉真幼稚園の東から観音山の下に至る。さらに、柳沢の集落の中をめぐり、水車の裏に出て、再び県道南にまわって谷川大島から、天神山へと続く道である。

また、倉真川の西北岸を里在家から山崎、大和田前、源作と統く根方道もあつたと思われる。

これらの道の各所に、神祠仏堂が安置されていることからも古いことがわかる。掛川誌稿にも『村中各所に神祠仏堂のごときも所に隨いておびただし……』と記され、当時から往来する人々の安全を守護していたことがわかる。

三、江戸時代の通婚圏

当時の峠道の利用の実証のひとつとして、倉真地域と周辺集落との通婚圏（親戚関係）をアンケートによつて調査してみた。サンプルが少なく充分ではないが、峠道を利用した交流の特徴をつかむことができるものである。

(一) 江戸時代の親戚はどこにあつたか（十六事例）

○西郷地区——滝ノ谷(3)、美人ヶ谷(2)、長間、石畑、構江、

(村松國義)

この調査結果から考察できることは、予想通り北街道に沿った桜木、西郷の北部山間地から、東山、五和を中心とする通婚圏としていることがわかる。また、栗本、西山口地区に多いことは、天神山の峠が、主要な交通路であったことを物語るものである。その他、倉真から峠越えの可能な北部山間部の集落との交流が盛んに行なわれていたことが明確である。

最近、学校教育の中で地域素材の活用がさけばれ学習の中に取り入れられている。地域学習は、自分の足で歩いて地域を知ることが大切である。この調査は、倉真小の地域学習の一環として実践した野外学習や、クラブ活動での実地踏査をもとにまとめたものであり、不備な点の多いことを許していただきたい。

○原泉地区——孕石(2)、大和田、居尻
○栗本地區——水垂(3)、初馬、殿ヶ谷
○東山地区——大久保、椎林、奥貝戸
○日坂地区——大野、横向、御林、踏掛、佐夜鹿
○東山口地区——千羽(3)、山鼻
○西山口地区——成瀧(2)、安養寺(2)、葛川
○原田地区——田代、宮ヶ島、平島
○原谷地区——本郷
○桜木地区——坂下(2)、遊家(2)、山中、宮下、飛鳥、森平
○五和地区——大代(3)、庄司(2)、神尾、大鹿、新池
○森町地区——草ヶ谷

方の橋

(昭和57・1)

